

わかくさ国体が決まった1980年、各競技団体の指導者を集めて講習会が開かれた。講師として招かれたのが、当時日本体育協会（現日本スポーツ協会）の理事であった、大西鉄之祐先生であった。ラグビーの名門早稲田大学を率いられた名監督とは聞いていたが、ご出身が戦前の奈良県立郡山中等学校（現郡山高校）の陸上競技部だったと聞いて驚いた。

ラグビーが培った心

時は北海中学。選手と全国中学校陸上競技大会で総合優勝を競った堀紘一郎氏（郡山中）を尊敬して、競技部に入学して活躍されたという。堀さんは私も指導者になって親しくご指導を頂き随分お世話

新聞記事で知り、お聞きしたかったことがいっぱいあったのにと悔やんだ。その後先生の綴られた「闘争の倫理」を、書店で見つけて夢中になって読んだ。先生のラグビーを通してのスポーツ論はとても

が2年後に迫った夏、県のラグビー成年の部チームが、島根県の稲佐海岸で合宿をしていた時に起きた出来事がある。昼食後の休息時に目の前の海水浴場で小学生が、高波にのまれ助けを求めているの

非常事態で示した勇氣

になったので、余計に親近感が湧いた。早稲田大学に進学後はラグビーで大活躍、後全本の監督も務められ数々の好成績を残されている。講演会后、数回お目にかかる機会はあるが、先生とスポーツを語ることにはなかった。

95年、先生の訃報を

明確で分かりやすい。例えば「スポーツ馬鹿と言われるが、馬鹿ではスポーツはできない。勝つためにどうするか知的行動がすべてだ」「ゲーム中悪いことはいくらでもできる。しかしフェアに戦うことがスポーツだ」など。

82年、わかくさ国体

を見て、数人の選手が海に飛び込み、流される4人の子どものうち3人を助け揚げ、あと1人を助ける途中に力尽きて帰らぬ人となった小賀野直一先生。彼はこの春大学を卒業して、県立王寺工業高校に着任したばかりの新任教員だった。大学時代はラグビー部の

主将でチームの要として活躍し、部員からも厚い信頼を寄せられていたという。他人の危険を目前にして、自分の危険を顧みず救いの

手を差し伸べることは、勇氣のいること、小賀野先生の行動はラグビーで培った不屈の精神が、ためらうことなく海に飛びこませた



スポーツで培う不屈の精神一。陸上競技愛好者が集まり、日々練習に励む「ならスポーツクラブ陸上競技『友の会』」。スポーツで得るものは大きい＝ロートフィールド奈良

のであろう。ラグビーは男の中の男のスポーツ、彼は真のラグーマンであった。大西先生の綴られた「闘争の倫理」には、人はことに当たってそれで命を落とすかもしれない、でも正しいと思うことはその人の覚悟と責任においてできること。判断が正しい悪いでなく、そういう場面に出会ったら、瞬時に行動できることが重要。これを教えるのがスポーツである。と述べられている。

大西先生のスポーツへの期待の言葉はそのまま、ラグビーに青春をかけてこられた小賀野直一先生の姿であり、真のスポーツマンシップを示された先生の勇氣は、40年経った今も脳裏に刻まれて忘れることはない。

第2、4金曜日掲載予定